

小泉八雲を知る旅

第5回 問題児にして人気者

第3回で「13歳でフランスの神学校へ行かされるまでの幼年期……」と書きましたが、間違いです。失礼しました。じつは、フランスで学んだ時期と場所については不明な点が多いようで、確かなことは、13歳の時から（フランスではなく）北イングランドの神学校で学ぶようになったことです。いずれにせよ、フランスと北イングランドの学校はどちらもローマ・カトリックの神学校であり、カトリック教徒の大叔母サラが、八雲を聖職者にさせることを期待して送り出したと見られています。

小泉凡著『小泉八雲と妖怪』（著者は八雲の曾孫で民俗学者。現在、松江の小泉八雲記念館顧問や焼津小泉八雲記念館名誉館長など）では、10歳頃にフランスの神学校で生活した書き方になっています——5時のミサに始まり、夜9時に祈りの時間。それ以外は、勉強と聖書の朗読。食事は簡素で、その間、福音書などを読みあげられたりなど、かなり窮屈な信仰生活を強いられたようです。しかも、足を洗わせてもらえるのは年に数回という、不潔な環境だったそうです（当時の衛生概念の遅れや、神学校の極端なまでの禁欲的・規律的な生活からでしょうか？）。

しかし、この学校ではフランス語の読み書きができるようになり、それは彼の財産になりました。というのも、後のアメリカでの新聞記者時代に、ボードレールの散文詩や、フローベル、ゾラ、モーパッサンなどの作品を多数英訳し、アメリカに紹介したのは八雲だったのです（テオフィル・ゴーティエの短編集『クレオパトラの一夜とその他幻想物語』の英訳も自費出版。処女作です）。

それから、この頃はもう滅多にお化けに悩まされることがなくなったようで、八雲本人の著述によると「有難く感じた」とあります。年齢的なものや環境の変化からでしょうが、異界に親しむ心根は変わらずとも、そんな自分を客観視できるようになったということでしょうか。

13歳で入学した北イングランドの神学校「聖カスパート校」は、前述したフランスの神学校同様、窮屈で退屈だったようです。カトリックの厳格な教えや環境になじめない彼は、「なぜ？」「それは本当にそうなのか？」といった、教義の根本を問い返すような質問をするなど、教師からすれば手の焼ける問題児でした。英作文では何度もトップになるなど優秀な生徒でもあり、教師には難儀極まりない相手ですね。そうした質問攻めは、彼の反抗心や旺盛な探究心の表れとも言えそうです。

一方、多く残っている学友による書簡や談話によると、一様に、生徒の間では人望があったことが分かります。その証言の一つを引用しておきます。「彼を覚えていないものはいない。大変目立った人

物で、生徒のなかでは大変人気があった。非常に奇抜なイタズラをする面白い人物であった。少年にしては立派な詩をつくり、また、大変な読書家であった。……作文だけは抜群であった。……いつも沢山の友人がいて……どの方面に進んでも成功するだろうと思われた」（歴史の謎を探る会編『小泉八雲と「怪談」の世界がわかる本』より）。

しかし、“陰のある少年”でもあったようです。後に文人として名声を得たというある友人によると、八雲は家庭のことや幼時については何一つ語らず、休暇にも帰省しませんでした。その友人は「それは少年時代の不幸の結果」だと思い、学校でもそう風評されていたそうです。そして、「顔にはいつも悲哀の色があった」と、その友人は八雲のことを評しています。

いずれにせよ、やり場のない悲しみや寂しさを抱え、恐怖にも苛まされていた大叔母サラの邸から抜け出した学校生活は、それほど不幸ではなかったようです。が、この学校で八雲は新たな不幸に襲われます。それは次回に。

<2026 年7月20日>

SIDE STORY

アインシュタインとの意外な関係

歴史上の偉人の中にも、いま活躍している著名人の中にも、子どもの頃、学校ではいわゆる問題児と見られていた人は多いものです。

例えばトーマス・エジソンが、「なぜ $1+1$ は 2 なのか？——粘土を 1 つと 1 つ合わせたら大きな 1 つの粘土になるのに、なぜ 2 個になるのか？」と教師を問い詰めて困らせたエピソードは有名なお話。また、アルベルト・アインシュタインは、強制されることを嫌い、歴史など興味のない学科の勉強は怠り、科学や数学の本ばかり読んで過ごしたそうです。

強制を嫌い我が道を行く、ということでは、八雲もアインシュタインも似た者同士（もっとも八雲は、英作文は大好きでも数学は大の苦手でした）。そんな八雲（1850 年-1904 年）とアインシュタイン（1879 年-1955 年）は、面識こそなかったものの意外な関係があったことをご存じでしょうか？

アインシュタインは 1922 年 43 歳の時、日本の出版社の招聘によって日本を訪問（ちなみに、渡航中にノーベル物理学賞受賞を知ります）。彼はその船上で受けた出版社のインタビューで、日本訪問の目的を 2 つ挙げています。科学の世界的連携による国際関係の親善という科学者としての目的とは別に、「ラフカディオ・ハーンなどで読んだ美しい日本を実際に自分の眼で確かめてみたい」「特に音楽、美術、建築などをよく見聞きしてみたい」と答えているのです。

アインシュタインが読んだ本とは、日本の美しい自然や暮らしの中に生きる人々の信仰心、そして、日本人の優しさなどを綴った『忘れぬ日本の面影』のことと思われます（『ばけばけ』では『日本滞在記』のことか、と）。また、『東の国から』も読んだかもしれません（『ばけばけ』でも同名。リテラリー・アシスタントの錦織が、死を前に自分の名前が扉に献辞されているのを見て、やせ細った頬を穏やかに緩めたあの本です）。『怪談』までも読んでいたかどうかは分かりません。が、アインシュタインは「光は波であり粒子でもある」として光の謎を解明した人。理系音痴の私には、そんな光の正体はまさに怪談のような不可解な存在に思えます。

いずれにせよ、文学者・八雲の描く直観的世界と、科学者・アインシュタインの万物を解き明かそうとする分析的世界に、相通じるものがあったように思えて興味深いですね。